

淀川庭窪ワンドの魚類相の変遷と今後の取り組み

山口翔吾・山本義彦・内藤馨・上原一彦（大阪府立環境農林水産総合研究所生物多様性センター）、
鶴田哲也（大阪産業大学 デザイン工学部 環境理工学科）

庭窪ワンド群は淀川左岸の守口市にあり、城北ワンド群に次ぐワンド群で、かつて、天然記念物イタセンパラの生息地でもあった。大阪府立環境農林水産総合研究所生物多様性センター（以下当センター）では1971年から2014年まで約10年毎に地曳網を用いた魚類相調査を実施してきた。また、2015年度から2017年度まで、月に1回、外来水生生物駆除と魚類相把握を目的とした定期調査を行ってきた。今回はこれらの調査結果から得られた知見について報告する。

約10年毎の調査結果において、全採集個体における在来魚の個体数割合が最も高かったのは1971年～1972年で、94.9%の値を示した。また、オオクチバスは1984年に、ブルーギルは1993年に初確認されるものの、1993年までは在来種数が19種確認されるなど、在来魚にとって良好な生息環境であった。一方、2004年の調査では外来魚の割合は89.5%となり、在来種数は8種と大幅に減少した。さらに、ボタンウキクサやナガエツルノゲイトウなどの外来水生植物の大量繁茂も確認され、在来水生生物の生息環境が急速に悪化した。イタセンパラは1984年に469個体（全採集個体数の47.6%）と多数確認されたが、1993年の3個体（0.2%）を最後に確認が途絶えた。

そこで当センターでは、2005年度より外来水生植物の特性把握調査や駆除試験を開始するとともに、国土交通省や淀川管内河川レンジャー（以下河川レンジャー）等による植物除去や環境改善の取り組みも始まった。その結果、2015年度から2017年度の調査では、外来魚の割合は21.0%～38.1%と低く抑制され、確認された在来種数は21種に回復した。それを受け、2016年度より、庭窪ワンドの一部で、多様な主体が連携する淀川水系イタセンパラ保全市民ネットワーク（以下イタセンネット）による外来魚駆除活動がスタートしている。

庭窪ワンドは、かつてイタセンパラの生息地であったことや、良好な生息環境が戻りつつあること、イタセンネットなどによる駆除活動や監視の目が入ることなどから、城北ワンドに続くイタセンパラの放流適地として期待される。

近年、庭窪ワンド付近の本流域などで、チャネルキャットフィッシュやコクチバスなど新たな外来魚も確認され始めていることから、外来種の駆除を継続するとともに、それらの侵入防止対策を図ることが必要であると思われる。なお、昨年、庭窪ワンドの一部において、淀川河川事務所による本流開口部の封鎖工事が行われており、イタセンパラの野生復帰に向けた取り組みが進んでいる。